

2022年 関西元気文化圏賞 贈賞理由



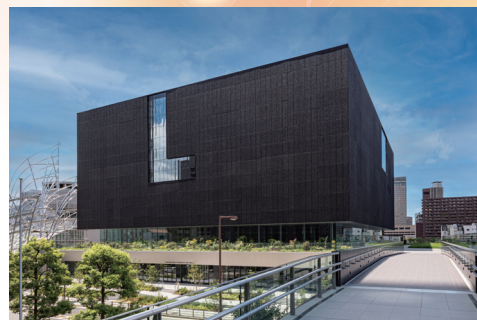
関西元気文化圏推進協議会

大 賞

おお さか なか の しま び じゅつ かん

大阪中之島美術館

構想から40年を経て2022年2月に開館。11月には早くも展覧会来場者数50万人を達成している。19世紀後半から今日に至る約6000点超のコレクションには佐伯祐三の名作やモディリアーニの裸婦像、海外で評価の高い「具体美術協会」の作品群など幅広い領域のコレクションを楽しむことができる。大阪のまちから美術をとらえ直す企画展示や、将来活躍が期待される関西ゆかりの若手アーティストに発表の場を提供するなど次世代の育成にも力を入れている。中之島の風景に突如現れた【黒いキューブ】は、国内にとどまらず国外からも人を集められる新たな文化施設と観光の新拠点としての役割が期待される。



特 別 賞



大阪・関西万博公式キャラクター「ミyakミyak」/山下 浩平

やま した こう へい

親しみやすく印象に残るデザインのキャラクターは、「ミyakミyak」という愛称もあいまって、メディアやSNS等で大きく取り上げられている。また、一定の条件のもと二次創作を許諾するなど、デジタルネイティブ世代にも受け入れられる新しいキャラクター像を作り上げ、2025年の大阪・関西万博の話題作りにつながっている。今後も大阪・関西万博の機運醸成に貢献するとともに、2025年の開催に向けてますますの盛り上げに期待したい。



公益財団法人鷹山保存会

たか やま ほ ぞん かい

鷹山は1826年の巡行以降降み山となり、長年にわたり御神体を飾る居祭を行ってきた。近年、復興の気運が高まり、2014年に囃子方を組織、2015年に一般財団法人鷹山保存会を設立し、2016年には公益財団法人の認定を得るなど、地域が一体となって復興に取り組んできた。2022年、新型コロナウイルス感染症の影響を乗り越え3年ぶりに実施された祇園祭の山鉾巡行に加わり、その196年ぶりの復活は多くの人を勇気づけた。



生駒高等学校野球部・天理高等学校硬式野球部

い こま こう とう がつ こう

てん り こう とう がつ こう

第104回全国高等学校野球選手権奈良大会決勝で対戦するも、生駒高等学校は主力選手の新型コロナウイルス感染により、メンバーを大幅入れ替え。天理高等学校が大差で勝利したが、生駒高等学校を思いやり喜びを表すことなく整列した。甲子園へは生駒高等学校が応援に駆けつけるなど交流は続き、9月に「再試合」が実現。再び天理高等学校が勝利したが、僅差の熱戦に試合後は両軍がマウンドに集まり歓喜の輪を作った。両校のスポーツマンシップ溢れる姿は日本中に感動を与えた。



©ORIX Buffaloes

オリックス・バファローズ

ペナントレースにおいては一時首位チームに11.5ゲーム差をつけられる苦境からの逆転優勝。日本シリーズでは2敗1分けの窮地に立たされながら、4連勝での日本一。「全員で勝つ」というスローガンを掲げ、劣勢に置かれても誰一人あきらめずパシフィック・リーグ連覇と日本シリーズ制覇を成し遂げたオリックス・バファローズの戦いは、野球ファンのみならず、多くの人を勇気づけた。関西の球団が日本一となったのは26年ぶり。

ニューパワー賞

かつら に よう

桂 二葉(上方噺家)



旧き良き大阪ことばが息づく古典落語を現代の新たな感覚で生き活きと演じ、2021年11月の「NHK新人落語大賞」で女性初の大賞受賞。東西の若手落語家たちの頂点に立ち、「女に落語はできない」という定説を覆し、落語界の歴史を塗り替える快挙を達成した。

2011年入門以来、約300年続く古典落語の世界に変革をもたらすべく奮闘を続け、上方落語を支える新たな旗手として今後の活躍が大いに期待できる。

いま むら しょう ご

今村 翔吾(小説家・書店経営者)



2022年1月に「穴太衆」の石工を主人公とした「塞王の楯」で第166回直木賞を受賞。そのストーリー性や躍動感、リアリティのある描写は高い評価を得ている。また受賞を契機に全国47都道府県の書店や学校を巡る「今村翔吾のまつり旅」として講演を行い、出版、書店業界の盛り上げに貢献した。本の素晴らしさを伝えるとともに、ダンスインストラクターだった頃、教え子に「夢をあきらめてるくせに」と言われて一念発起し、「小説家になる」という夢を叶えた自身の体験を語り、「夢は叶う」と子どもたちに訴えている。

撮影/佐賀章広